

「運河」と小名木川、そして砂町中学校

校長 細谷美明

「運河」という冊子の名前を聞いたとき、私は砂町中学校と小名木川の古くて深いつながりを感じずにはいられませんでした。

本校校歌の歌い出しはこうです。「小名木川 満ちくる潮に 波こえて 船ゆき通う」。また、二番の歌い出しはこうです。「力あり 鉄打つ響き わき上がる 雲なす煙」。……この詞を聞くたび、私は小名木川が長く本校の立つ砂町の地を見つめてきた歴史を思い起こします。

小名木川は、徳川家康が江戸城に入った15世紀終りから整備された人工の川、つまり運河でした。家康は、当時ひなびた漁村にすぎなかった江戸の町を日本一の城下町にすべく広大な都市計画を打ち立てました。城下町の成立する条件の一つに水陸交通路の整備がありますが、小名木川はまさに江戸の動脈の一つでした。

小名木川は、当時、下総国と呼ばれた今の千葉県から人々の生活に欠かせない塩と水産物や野菜を江戸に運ぶための水路として開発されました。そのころは、おそらく千葉から塩や野菜を満載し江戸の町をめざした多くの船が川を埋め尽くしていたのでしょう。その後、江戸幕府の新田開発の奨励もあり、砂村新左衛門という人が中心となり、海だった小名木川の南部を埋め立て砂村新田ができました。新田といっても元々海だったところなので大部分が水田よりも用水がいらぬ畑地でしたが、実はここは「江戸野菜発祥の地」でした。さらに、砂村新田で作る野菜は今でいう「ブランド野菜」だったのです。秋から冬にかけ畑の上でわらを燃やし土の温度を上げるなどして寒い時期にナスやインゲン豆を栽培する「促成栽培」を行っていました。したがって、砂村新田の野菜は高値で取り引きされ将軍家の献上品にもなっており、江戸の人々には広く知られる名産物でした。

明治時代に入り、近代工業化の波が砂村新田(砂町)にも押し寄せ、小名木川の周辺には多くの工場が立ち並ぶようになりました。やがて第二次世界大戦が終わり、土岐善麿氏が砂中校歌の作詞のために本校周辺を歩いた頃も、大小の鉄工所があったものと思われます。一時期、川は工場や家庭からの排水で汚染されたこともあったようですが、人々の努力もあり、現在ではたくさんの魚が泳ぐ川に再生されました。このように、小名木川はかつての砂村新田の地に初めてできた中学校である本校には欠かせない存在なのです。

四百年以上もこの地を流れる小名木川。この間、沿線の風景はめまぐるしく変わりました。本校に通う生徒も含め、この地に住む人々をいつまでも温かく見守っていてほしいと願いながら、本校校歌を口ずさんでみるのもよいのではないのでしょうか。

砂町再発見

校長 細谷美明

みなさんは、亀高小学校の前の交番のところにある交差点を左に折れて歩いていくと、左側に小さな池があるのを知っていますか？私は、砂町中学校に赴任して以来、この池のことがずーっと気になっていました。初めてこの池の存在に気付いたのは、一昨年の6月頃だったと思います。小名木川小学校の南側を走る稲荷通りを歩き砂中へ向かっていたときに、空から一羽のアオサギがこの池に舞い降りたのです。そのとき初めてここに池があることを知りました。よく見ると、葦がたくさん生え水の色も淡い緑色です。何よりもアオサギが来るというのは、そこにタニシなどの貝類や小魚がいるということであり池の水がきれいで栄養分があるということなのです。つまりこの池は、ため池ではなく、地下から水が湧き出ているか、川から常に水が注いできているということになります。さらに、周囲をよく見ると、家はあまり建てられておらず、広い駐車場と大きな木が一本立っていて、ここだけ何か取り残された感のする場所だということもわかりました。

地域の人に聞いてみたところ、意外なことにみなさん口をそろえて「そんな池ありましたっけ」という反応です。そこで、砂中の地域をよく知る元砂町中学校長の太田功先生に聞いてみました。太田先生曰く「昔の金魚の養殖池の名残ではないか」というお答えが返ってきました。こうなると益々興味がわいてきます。校長室にある「江東区史」をみると、関東大震災後の昭和時代に池や沼が多かったこの砂町地区に金魚の養殖池が多く集まるようになった、としています。さらに、秋山吉五郎という人が元々あった池のほかに畑を養殖池に変え面積を増やし養殖業をさかんにしたことがわかりました。秋山さんは新種改良にも力を尽くし、「秋錦」「秋翠」「朱文金」「金欄子」「キャリコ」といった多くの新種を生み出したそうです。当時の地図を見ても、今の北砂五丁目の大部分は養殖池だったことがわかります。

これまで昔の砂町地区の面影を残すのは小名木川だけかと思っていましたが、こうしたところにもまだ残っていたのですね。インターネットでさらに調べてみたら、平成7年に江東区が主催する「まちなみ景観賞」に「北砂五丁目金魚養殖池跡」として、この池が選ばれているではありませんか。やはりただの池ではなかったようです。ただ一つ残念なことは、現在、池の周囲に空き缶やペットボトル、プラスチック製品などのごみが捨てられていることです。池は、個人の所有地らしく、区で管理しているわけではないようで、池の維持にはいくつかの課題があるようです。

昔の良さが姿を消す今の時代にあって、砂町地区にあるこの養殖池は貴重な存在です。今度ここを通ったときにぜひ見て一緒にこの池のことを考えてみませんか。

砂町探訪「スイカと松本橋」

校長 細谷美明

大学で歴史を勉強していた私には、町を歩いているとき見かける「気になる地名」について調べるといふ癖があります。今から10年ぐらい前だったでしょうか、江東区の社会科の先生方から講演会の講師で呼ばれたときも、事前に江東区の地図を見ているうちに、「仙台堀」「毛利」「白河」「元加賀」の地名が江戸時代の大名屋敷と関係あるのかもしれないと考え始めたら気になり、その由来を調べた記憶があります。「毛利」だけは違いましたが、あとは予想通りでした。そんな私ですが、砂町中学校に赴任して以来、これまでいくつもの「気になる地名」に出会っています。

今回紹介するのは、「砂町松本橋東(西)」という地名です。この地名を聞いて「ああ、あそこか」とわかる人は砂中生に何人いるのでしょうか。第六砂町小学校の先にあるミニストップの交差点についている信号機の看板に書いてある地名です。はじめは、「松本橋」なのに橋がないので気になったのですが、よく見れば仙台堀川が下を通っているので、ここは立派な「橋」であり、疑問は解けました。しかし、次なる疑問がわき起こりました。「この一帯は松本という地名がないのに、なぜ松本橋なのか?」・・・調べていくうちに出てきたのが江戸時代の促成栽培のことです。

一昨年の「運河」で江戸時代の砂町(当時は「砂村」)でさかんだった促成栽培のことを取り上げました。その際、茄子やキュウリ、インゲン豆を秋から冬にかけて栽培し、將軍家にも献上していたことに触れました。今風に言えば、砂村で栽培する野菜はブランド野菜ということになります。そして、これら促成栽培で作ったブランド野菜生みの親が松本橋の名前の由来になった人物「松本久四郎」だったのです。砂村では先ほど触れた野菜のほかに、スイカも促成栽培で作っていました。あの八代將軍徳川吉宗が熱病にかかったときに季節はずれにもかかわらず砂村からスイカが献上されたという記録が残っているそうです。つまり、歌の題名ではありませんが、砂町は「スイカの名産地」だったのです。

昨年ここで取り上げた「北砂五丁目金魚養殖池」で、「秋錦」「朱文金」「キャリコ」といった多くの新種の金魚を生み出した秋山吉五郎といい、今回の促成栽培生みの親、松本久四郎といい、砂町という地域には古くから研究熱心で時代の先端を行く人物が数多くいたことがわかります。時代が変わり、社会が変わっても、こうした地域の偉大な先人がいたことを私たちは忘れてはいけないうし、これら先人を誇りに思いつつ社会の役に立つべき人間になることへの努力を続けていかなければならないでしょう。がんばれ!砂中生。

【参考文献】

深川江戸資料館「資料館ノート第78号」(平成20年11月26日)他